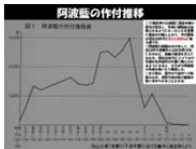


整理番号	徳渴 1	袋井用水と楠藤吉左衛門		
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場 所	徳島県徳島市鮎喰町2丁目			
見所・アクセス	徳島市鮎喰町二丁目、「上鮎喰」バス停のすぐ東側に流れているのが袋井用水です。 そこには、徳島県指定文化財の史跡の袋井用水水源を示す案内板と楠藤翁頌徳之碑があります。			
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4  写真 5  写真 6  写真 7  写真 8			
解説文	徳島市鮎喰町には徳島県指定文化財の史跡の袋井用水水源地（写真1）と楠藤翁頌徳之碑（写真2）があります。 徳島市鮎喰町二丁目、「上鮎喰」バス停のすぐ東側に流れているのが袋井用水です。 そこに往時の水源地跡を示す案内板（写真3）があります。それには、名東郡島田村庄屋・佐藤吉左衛門（のちに楠藤に改姓）が、旧島田村・庄村・蔵本村（約三百町歩）の水不足に悩む農民の姿を憂い、元禄五年（1692）から元禄十二年（1699）まで、約七年をかけて袋井用水を開削したと記されています。また、また現地看板（写真4）には袋井用水普請図が描かれています。 四国三郎物語（建設省徳島工事事務所平成9年3月発行）には、藩政時代最大の美挙として、楠藤吉左衛門（なんとう きちざえもん）の水源地探しのエピソードを次のように伝えています。「水は必ずある。掘れば水は出る。水源はきつとできる」という確信を持っていた。それは庄村から蔵本村へかけてもと佐吉川の流れた跡が残っていて、ところどころにガマやアシなど水辺に育つ草が生え、ところどころに水溜りができていることを知っていたからである。吉左衛門は昼間ちょっとでも時間があると鉤をかついで外出した。そして地面の低い水が出そうだと思うようなところを目あてに掘ってみる。夜は夜で黙って家を出るとところかまわず寝ころんで地面に耳をあてた。もしや地面の下で水の流れる音が聞こえはせぬかと一心不乱一夜遅くまで探しまわるのである。村の連中は「庄屋の旦那は気が狂った」と噂し合うようにさえた。だが、吉左衛門は毎日、水源地探しに夢中になった。そしてあるとき、吉左衛門は上鮎喰往還の南方堤の下に水が少し湧き出していてガマが生えているのを見て、昔の水脈を考え、水源地の溝となることを確信した。」、そして困難を極めた水源地の掘削として「郡奉行に願い出て幅十間（約18メートル）、長さ二百間（約360メートル）の用水堀を掘る許可をとりつけて工事に着手したわけだが、その間再三にわたる掘削許可出願に、藩は難色を示したという。（次ページへ続く）→			

	(前ページより続く) → ようやく計画の半分のスケールの規模なら良しとする藩の許可を得て、勇躍として農民総動員で出役、水源地掘削工事は始まった。大量の土砂の運搬に鍬ともっこによる土木作業は難渋を極めた。待ちに待つ水はいっこうに出てこない。農民の失望の色は濃い。やがて冷笑に変わって、とうとう工事現場には吉左衛門ひとりが立ちつくしていた。工事費一切を自弁しての事業一このとき、吉左衛門の胸に去来した思いはどのようなものであったろう。 『吉野川百年史』は、「しかし吉左衛門は諦めず、夜中人の寝静まったころ、彼の考えている場所にうち伏して、水の音を聞き定め、改めて又の日に、なお一尺(約 30 センチメートル)ほど掘り下げても水が湧き出ない時には、我首を奉りますと官に申し出て許しを乞い、再び穿ったところ、にわかに水の湧くことを噴き出すように、その辺りを浸し溢れた。人々皆感動したという」と、水脈を掘り当てた臨場をドラマティックに描き出しています。 吉左衛門は水路造成工事の完成の目安がついたとき、神仏への感謝の念をこめて、百か日の四国霊場五か所参りに出ました。享保五年(1720)、十五番国分寺本堂前に「結願奉納碑」を建立しました。当時の国分寺跡は、写真5の史跡 阿波国分寺跡を示す図に絵かれていますが、現在の第15番札所 阿波国分寺境内の写真6よりかなり規模が大きいことがわかります。平成9年の調査時には結願奉納碑(写真7)は境内本堂向かって階段手前にありましたが、現在は、鐘撞き堂の南側に写真8のように移動され残されています。 水源地が完成したのちも、さらに三代にわたって受け継がれて水路は拡張されていきました。この楠藤家三代によって袋井用水は完成し、島田・庄・蔵本各村の数百町歩の水田は潤い、農業生産は一段と発展したのであるといわれています。
--	---

得られる 教訓	今日に残る袋井用水水源地は、農民のために私利私欲を捨てて悪戦苦闘した楠藤吉左衛門の功績を後世に伝える資源であり、水源、水の大切さを教えています。							
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降		

整理番号	徳渴 2	麻名用水と井内恭太郎							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	徳島県吉野川市川島町川島								
見所・アクセス	吉野川市川島町の川島の城山の南に吉野川に麻名用水取水口があります。そこにある麻名用水碑には、徳島県屈指の大農業用水「麻名用水」の完成に尽力した井内恭太郎などが取り組んだ大事業の内容が刻まれています。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4  写真 5  写真 6								
解説文	徳島県屈指の大農業用水「麻名用水」（写真 1）が完成したのが明治 45 年であり、着工が明治 39 年であるから、実に足かせ 7 年にも及ぶ大事業（写真 2）でありました。吉野川の右岸（南岸）の鴨島町から石井町にまたがって、南北二つの幹線と多くの支線水路が設けられ、1,250 町歩あまり（大正 3 年調べ）の水田を灌漑（写真 3 の図）できるようになったのです。 阿波藍が明治 30 年代に約 15,000ha をピーク（写真 4 の阿波藍の作付推移のとおり）、ドイツから安価な化学染料が大量に輸入されるようになると、たちまち阿波藍の市場を奪いとり衰退し、その後は、藍作から稲作への転換のため、堤防や用水路の整備が強く求められることとなりました。吉野川の明治 40 年からの第一期改修や麻名用水がそうです。幕末から明治にかけて、吉野川の利水を提唱した人に、後藤庄助、庄野太郎、豊岡蒔墩らがいます。彼らは吉野川流域に大規模な用水路を開削することにより藍作から米作への転換をはかり、農業経営を安定したものにしたいと願っていましたが、彼らの壮大な構想は容易に実現には至りませんでした。井内恭太郎（写真 5）は、明治 30 年、麻植郡長として赴任し、麻名用水の構想を立案し、井内らは再三にわたり用水案の実現を説いてまわったが、農民は聞く耳をもたなかった。この時の様子が麻名用水碑（写真 6）に刻まれています。明治 37 年にこの地域一帯が大干ばつに襲われ、これがきっかけとなって、明治 38 年には「記念麻名普通水利組合」が結成され、管理者に井内恭太郎が就任し工事を完成させました。のち美馬、名西郡長となり、板名用水（明治 45 年）建設にも努力しました。								
得られる教訓	麻名用水碑に「一身を犠牲として隠忍自重（いんにんじちょう）ついに今日あることを至（いたら）せり、」と記されているように、計画に反対する住民と粘り強く対応した強力な指導者により社会資本整備が進んだことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	徳渇 3	雨乞い行事の八幡神社							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	徳島県三好市池田町白地本名								
見所・アクセス	三好市池田町白地には、雨乞い行事を行う八幡神社があります。国道 33 号の池田ダムの湖水に架かる橋を渡り、そのまま直進し国道 192 号入り約 200m 行ったところに左から合流する道路に進み、約 150m のところの信号のある交差点の山側道路を上った所にあります。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3								
解説文	三好市池田町白地には、雨乞い行事行う八幡神社（写真 1）があります。 明治から大正にかけて、三好市では夏がくると毎年のように干ばつが続き、三年に一回ぐらいは、とうもろこし・たかきび・あわ・こきび等が畑で黄色くなり、日は亀の甲 かんかいようすいのようにひび割れて、大きな被害を受けていました。この頃は、濯湖周水として、馬路 川や馬谷川から水をとっていましたが、夏になると水量が少なくなり、高台などでは、飲料水の井戸や湧水も枯れてしまい、手のほどこしょうがありませんでした。 このため、農民は雨乞いをして、八幡神社（写真 2）に雨降りの祈願をしていたと言います。 四国防災八十八話第 10 話には、「昔、三好市、阿波市などでは、吉野川沿いにありながらも、田畑が河岸段丘の上にあるために、平地の底を流れる吉野川の豊かな水を利用することができませんでした。このため、ひでりが続くと、干ばつに苦しめられてきました。資金や技術が十分ではない時代に、人々ができることは神様にお願いすることでした。旧池田町では農民が八幡神社に集まって、雨乞いの祈とうや踊りをしました。」とあります。 地元では「月夜にびばりが足を焼く」。吉野川の河岸段丘(写真 3 のように池田ダムの湖水を望めるような高い土地) は、ひでりが続くと、夜、木々の枝にとまったひばりが足を焼くほどに地表が熱く熱せられて水不足になったと言います。								
得られる教訓	地域の雨乞い行事から学び、普段から渇水対策を考えておくことです。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			